

マルティニクにおける文学言語の生成 ——詩と小説の間

立 花 英 裕

2016年の3月、私は、マルティニクでルネ・メニル René Ménil の未亡人に偶然出会った。ルネ・メニルとは、第二次世界大戦中にエメ・セゼール Aimé Césaire とともに雑誌『トロピック *Tropiques*』を創刊した主要なメンバーの1人である。今日、ルネ・メニルは忘れかけられているが、セゼールと共にこの時代のマルティニクの知識人の双壁と言われている。1907年生まれだから、セゼールよりも6歳ほど年上になる。私は、2週間ほどの予定でマルティニクに滞在していたのだが、だれかがルネ・メニル未亡人に、日本からエメ・セゼール研究者が来ていると言ったらしく、ある講演会である婦人と話していると、私に会いたい人がいると告げられたのである。その人はどなたなのかと尋ねると、ルネ・メニル未亡人だという返事が返ってきた。一瞬、私は声を失った。ルネ・メニルは2004年に97歳で亡くなっているが、私の中では過去の人で、その夫人も故人だろうと思い込んでいたからである。たとえ生きているとしても、相当のお歳の方だろうと推測した。しかし、どんな人なのだろうと好奇心も募った。まもなくメニル未亡人から直接電話が来た。若々しい声なのでびっくりした。ともかく、シェルシェール市の海水浴場で会おうということになった。シェルシェール市とは、マルティニクの中心都市、フォール＝ド＝フランスの北端に接する町で、アイティユ大学マルティニク校があり、カリブ海に面した白い砂浜の海水浴場がある。そのブル＝ド＝ネージュ（＝雪だるま）という、砂浜の上に椅子とテーブルと、パラソルを置いたレストランがよいだろうということになった。

この出会いが、私にとって忘れがたい時間になるとは思ってもみなかった。メニル夫人から、あるものをプレゼントしていただいたのである。それは、アンドレ・ブルトンとルネ・メニル、そしてエメ・セゼールとの、あの奇跡的な邂逅の時間を今に伝えるブルトン自筆の署名と献辞である。1941年4月にアメリカ合衆国への亡命途上だったアンドレ・ブルトンがエメ・セゼールに偶然出会ったという有名な逸話がある。メニル未亡人は、75年前になる、その話をしてくれたのである。

両大戦間から第二次世界大戦にかけてのエメ・セゼール

しかし、プレゼントの話をする前に、エメ・セゼールという、残念ながら日本ではあまり知られていない大詩人について、特に彼が第二次世界大戦中に何をしていたのか、またそれまでの軌跡がどのようなものであったかを、ごく簡単に記しておこう。

エメ・セゼールは、1913年6月26日に、マルティニクの大西洋岸の小さな町パス＝ポワントに生まれ、フォール＝ド＝フランスにあるリセ・シェルシェールを出た後、1931年にパリ留学している。この時代に、セネガル出身の詩人レオポール＝セダール・サンゴールや南アメリカの仏領ギューイエンヌ出身の詩人レオン＝ゴントラン・ダマスらと、ネグリチュードの文学活動をはじめたことはよく知られている。1935年に高等師範学校の入学試験に合格するが、それまでのリセ・ルイ＝ルグランでの準備学級時代は、奨学金でばかり買っていたので、極度に切り詰めた生活を強いられていた。それだけでなく、勉学よりも詩作に精を出す中で行き詰まりを感じていたようだ。この状態は高等師範学校入学後もあまり変わらず、危機的な状況に陥ったことも再三だった。親友のサンゴールは、セゼールが学校に出てこなくなり、自殺するのではないかと心配した時期もあったと証言している。セゼールは、当初、混血、すなわちムラートが支配する社会マルティニクに帰るつもりはなかったようだが、ある時点で、心境に変化が生じ、マルティニクに戻

る決心をする。この時期に代表作となる長詩『帰郷ノート *Le Cahier d'un retour au pays natal*』が書かれたと、推測することができる。『帰郷ノート』は、帰島を決意するまでの自己認識の変化を語った作品としても読めるからである。セゼールは、フランス本土で教職に就くためのアグレガシオン取得や博士論文の執筆を放棄する。そして、『帰郷ノート』を書き上げ、雑誌『ヴォロンテ *Volontés*』（1939年）に掲載するべく原稿を渡した後、1939年8月、文学士の免状だけを携えて帰路につく。帰島の船ブルターニュ号には、留学中に結婚したシュザンヌと、生まれた2人の子どもも乗っていた。そして、マルティニクに着く前に船上で、第二次世界大戦勃発の報に接するのである。

帰島後、セゼールは、リセ・シュルシュールの教員をしながら、やはり教員になった妻のシュザンヌの助けも借りて雑誌『トロピック』を創刊する。この時代、マルティニクはヴィシー政権下であり、本国から遠く離れているため周囲から経済的に孤立し、政治的にも閉塞していたが、セゼールにとっては、逆説的にもっとも自由に創作に打ち込めた時代だったのかもしれない。戦後になると、彼はフォール＝ド＝フランスの市長に選出され、さらに国会議員ともなり、政治家としての様々な拘束の中でしか執筆できなくなるからである。雑誌『トロピック』には、ルネ・メニル他、主にリセ・シュルシュールの教員たちが参加した⁽¹⁾。

ルネ・メニルの軌跡

さて、ルネ・メニルについても、簡単にその経歴を記しておこう。既に述べた通り1907年生まれだから、セゼールよりも先に給費留学生としてパリに留学し、同じリセ・ルイ＝ルグランに在学している。1932年には、あの名高いブランシュ広場のカフェに出入りするようになり、シュルレアリストたちと交際する。この時期、メニルはアンドレ・ブルトンと出会っている。非常に親しくなり、フォンテーヌ通りの彼の自宅によく招かれたという。ブル

トンの部屋で過ごしたあとは、階下のキューバ・クラブの店に入って、また話し込んだそうだ。ネグリチュードを予告する先駆的雑誌『正当防衛 *Légitime Défense*』にルネ・メニルが参加したのは、パリのシュルレアリストたちと交際していたことが、大きく作用している。『正当防衛』は、1932年に1号だけ出た雑誌で、マルクス主義とシュルレアリスムの融合を目指し、フランスの植民地主義やマルティニク文学の同化主義的傾向を告発するものだった。ルネ・メニルは、フランスでシュルレアリストになり、かつまたマルクス主義者になったのである。サンゴールと活動を共にしたとはいえ、フランスの文学者たちとも知識人ともあまり交わらなかったセゼールとは対照的だった。1935年、ルネ・メニルは帰島する。そして、コミュニスト・グループのフロン・コマン Front Commun を設立。この小グループはまもなく、ジュール・モノロ Jules Monnerot が1920年に設立した、もう一つのコミュニスト・グループ「ジャン・ジョレス」と合流し、フランス共産党のマルティニク地方支部 La Région communiste de la Martinique を設立する。ルネ・メニルは、生涯、マルクス主義者であることを貫き通し、1956年にエメ・セゼールと袂を分かつことになる。しかし、すでに述べたように、1941年に雑誌『トロピック』に参加したときは、文学的にはセゼールと非常に近しかった。いや、当時セゼールは、 Kommunismus に共感を覚えていたのであり、マルクス主義者ではなかったが、政治的にも2人は非常に近しかった、と言った方がいいだろう。しかし、1956年に共産党から離脱するセゼールとは異なりルネ・メニルは一貫して共産党マルティニク地方支部で活動、新聞『ジュスティス *Justice*』編集主幹、機関誌『アクション *Action*』編集主幹、共産党支部の政治局員という要職を歴任する。

アンドレ・ブルトンのマルティニク訪問

そろそろブルトンと雑誌『トロピック』同人たちとの出会いに戻ることにしよう。ブルトンがマルティニクに到着したのは、『トロピック』創刊号が

出たばかりの1941年4月である。ブルトンと、セゼール、メニルとの出会いはネグリチュードの歩みにおいて極めて重要であり、すでに多くの人が語っているが、念のため、復習しておこう。

アンドレ・ブルトンが、ニューヨークに向けてマルセイユを出港したのは1941年3月25日である。フランスを離れるのは、経済的にもたやすいことではなかった。彼が亡命できたのは、2人のアメリカ人のお蔭である。その1人は、ヴァリアン・フライ Varian Fry という32歳の青年だった。フライは、アメリカの緊急救済委員会 Emergency Rescue Committee から派遣され、ナチス政権によって危険に晒されているユダヤ人や文化人をアメリカ合衆国に亡命させるべくマルセイユで活動していた。ブルトンが乗船したキャピテーヌ・ポール・ルメール号は、フライによって調達された古びた貨物船だった。しかし、この船はニューヨークへ行くのではなく、フォール＝ド＝フランス行きだった。そこから先は別の船でニューヨークに行く必要があった。キャピテーヌ・ポール・ルメール号に乗り込んだ亡命者は350名程度だったと言われている。その中にクロード・レヴィ＝ストロース、キューバの画家ウィフレッド・ラムらがいた。アンドレ・マッソンは別の船で少し遅れてやって来て、ブルトンらと合流している。ブルトンの出国を助けたもう1人は、著名な美術収集家で富豪のベギー・グッゲンハイム Peggy Guggenheim である。グッゲンハイムは、アンドレ・ブルトン一家の旅費を提供し、ブルトンがニューヨークに着いてからも経済援助をしている。

船は4月24日にフォール＝ド＝フランスに到着。アンドレ・ブルトンは、ヴィシー政権の支配下にあったマルティニクで危険人物と見なされ、トロワ＝ズィレにあるラザレと呼ばれる収容所に監禁される。ようやく収容所から出られるようになると、ブルトンは喜び勇んで、妻のジャックリーヌと娘のオーブを連れて、フォール＝ド＝フランスの町を散歩する。そこから先は、アンドレ・ブルトンの言葉を直接聴いてみよう。

「そんな状況の中で私はたまたま娘のためにリボンを買うことになり、

リボンが店先に並んでいた手芸品店に入ったのだが、店内に一冊の刊行物が展示されているのを見て、ページをめくった。(…)私は目を疑った。そこで言われていたことは、まさに言わなければならないことだった。しかも、これ以上ないほどうまく言われていただけでなく、これ以上ないほどの高みにおいて言われていた。(…)エメ・セゼール、それが語っている者の名前だった」(『マルティニク蛇使いの女』)

ブルトンは、手芸品店で読んだ詩に驚嘆し、店の人に展示されていた雑誌について尋ねる。尋ねられた相手は、偶然にもルネ・メニルの妹だった。こうして思いがけないルネ・メニルとの再会が実現。翌日にはエメ・セゼールが紹介されることになる。3人は、ブルトンが島を離れる5月16日まで親交を深める。アンドレ・ブルトンがマルティニクに残した衝撃は計り知れないものがあるが、パトリック・シャモワゾーとラファエル・コンフィアンは『クレオールとは何か』の中で、この出来事を次のように評している。

エメ・セゼール以前には、われわれはやむなくパリのお墨付きを求めざるをえない詩人や小説家の亡霊だった。セゼールは、船倉の叫びと手を結ぶことでタブーを破った。彼がシュルレアリスムの「奇蹟の武器」を借り受けたのは(作品を重ねるにつれてそれから遠ざかるが)、ヨーロッパ世界の自足をあらゆる種類の自由で撃ち、それを更新するためだった。そしてブルトンが偉大だったのは、自分の起源の文化に対するこの攻撃にまったく気を悪くしなかったことだ。彼は謙虚にも、セゼールを20世紀第一級のフランス語詩人と認めたのだ⁽²⁾。

ルネ・メニル未亡人の贈り物

このあたりで、2016年3月のメニル未亡人との出会いに戻ることしよう。約束のブルー＝ド＝ネージュに行ってみると、強い太陽を浴びた海がまぶし

かった。このレストランは、あまり広くはない海水浴場の一画にパラソルを立て、その下にテーブルを並べている。座ると足の下が砂地なので、靴の中に少しずつ砂が入り込む。砂の上のテーブルは不安定なので、食事中も室内のレストランのような落ち着きはえられない。その代り、浜の風が頬を撫でるし、すぐ傍に海が見渡せるので解放された気分になる。この日は風が落ちて、昼下がりのけだるさの中で太陽の乾いた強烈な光線が砂浜に照りつけていた。炎のような暑さなのにどうしてレストラン「雪だるま」なのだろうと思ひながら座った。あいにくパラソルのあるテーブルはすべて塞がっていたので、日差しをまとも浴びる大きな木製のテーブルに座るしかなかった。ほどなくしてルネ・メニル未亡人が現れた。

メニル未亡人は、ジュヌヴィエーヴ・セズィル＝メニル Geneviève Sézille-Ménil と名乗った。職業高校の先生をしていたが、いまは退職しているという。童謡の歌手でもあり、作曲も手がけ、CD を何枚か出しているということだ。素肌の頬がつややかな、幾分大柄な女性である。気取りのない柔らかな声で静かに、だが休みなく話す人だった。私は、彼女とルネ・メニルの出会いを静かに聴いた。

ジュヌヴィエーヴさんがマルティニクにやってきたのは、1971年、23歳の時だったそうだ。フランスですでにリセの教員をしていたが、68年5月以降の左翼運動に参加したため、学校を追われ、マルティニクの職業専門高校に赴任を命じられた。ルネ・メニルに出会ったのは、着任してから2週間経つか経たない時だった。一目見た瞬間からメニルの人間的魅力にすっかりとらわれてしまったと、ジュヌヴィエーヴさんは言う。「私は、彼の人格的な気高さに打たれました。彼の眼差しには、なんとも言えない魅力がありました。41も歳の差がありましたが、私たちはお互いを尊重していました」。

2人は、毎週火曜日にマルティニク文化センター (CMAC) で開かれるシネクラブに通い、映画が終わった後も夜遅くまで話し込んだ。会話には罗兰・シュヴェロール Roland Suvélor がよく加わったそうだ。

ロラン・シュヴェローは、マルティニクの有名な知識人である。彼についても一言ふれておこう。彼は、1969年から1974年にかけて、エドゥアール・グリッサンが創設したマルティニク研究学院 L'Institut martiniquais d'études で教鞭を取ると共に、同じくグリッサンが刊行した雑誌『アコマ Acoma』に参加している。1922年11月にパリで生まれているが、生涯のほとんどをマルティニクで過ごしている。中等教育はリセ・シェルシュールで修め、1939年にセゼールの聾唖に接する。その後、マルティニクで法律学を修め、終戦直後になってパリに留学、ソルボンヌで哲学の学士号を取得している。

シュヴェローはシネフィルとして知られ、1952年にシネクラブを創設、20年間、その会長を務めた。このシネクラブは、長い間、マルティニクの文化的社交の場だった。ルネ・メニルも大変な映画好きだった。もっと後の映画作品だが、ヴィスコンティの『ベニスに死す』に夢中になったそうだ。

ジュヌヴィエーヴさんの証言によれば、ルネ・メニルとロラン・シュヴェローは大変親しかった。一方はマルティニクの共産党政治局員まで務め、生涯マルクス主義者を標榜したが、他方はむしろ社会主義者だった。しかし、戦後の変転の中で二人ともエメ・セゼールに対して距離を置いたという共通点があり、それが二人を接近させたのかもしれない。

さて、ジュヌヴィエーヴさんとルネ・メニルの交際に戻ると、毎週火曜にシネクラブで会っていた二人の関係は、当然のことながら深まっていった。しかし、ルネ・メニルには配偶者がいたので、2人の仲は公表を許されぬままに持続された。秘密にする必要がなくなったのは、配偶者（クロード・ヌ・ブノア）が他界した1981年以降のことだそうだ。2人は最終的には結婚したが、1998年9月になってからである。ルネ・メニルは2004年に97歳で亡くなっているから、その6年前ということになる。

ジュヌヴィエーヴさんが強調したのは、ルネ・メニルの控えめな性格と道徳的な高潔さだった。人並みはずれた教養と知的能力をもちながら、裏方の

仕事を黙々とやるタイプで、セゼールとは好対照だった。淡々と繰り広げられるジュヌヴィエーヴさんの話を聴けば聴くほど、彼女がルネ・メニルを深く敬愛し、彼の業績を世に広めることに余生を捧げているのが伝わってきた。ルネ・メニルがマルティニクではなぜか忘れ去られていることへの苛立ちもあるのだろう。

私は話を聴いているうちに、なぜかブルトンのマルティニク訪問を思い出した。ジュヌヴィエーヴさんがルネ・メニルに出会ったのは、1971年だから、アンドレ・ブルトンとの出会いのことなど聞いていないだろうと思った。しかし、それでも何か知っていないかどうか訊いてみたいという気持ちは高まるばかりだった。というのも、このポエティックな出会いは、それが事実であるには、あまりに美しすぎるからである。ブルトンがマルティニクの文学者たちと出会った事実は否定できないが、しかし、それは全くの偶然ではなく、旧知の仲だったルネ・メニルにブルトンがあらかじめ連絡をとっていたのではないかという疑念がいつも頭のどこかにあったのである。

「ジュヌヴィエーヴさん、アンドレ・ブルトンのリボンの話、あれは作り話でしょう」。すると、真顔になった彼女から、事実だという返事が返ってきた。そして、この砂浜での会合が終わってから、彼女は様々な資料をメールで送ってくれたが、その中にブルトンがメニルに宛てた献辞の言葉があったのである。それは、『白髪拳銃』の表紙にアンドレ・ブルトンが残した献辞の言葉をPDF化したものだった。ブルトンの自筆だった。

A mon très cher René Méné / en souvenir du merveilleux / ruban
qui m'a fait le / retrouver à Fort-de-France / André Breton / mai 1941

私の親愛なるルネ・メニルへ フォール＝ド＝フランスでの再会を実現
してくれたすばらしいリボンの思い出として アンドレ・ブルトン 1941
年5月

シュルレアリスムの首領は、献辞の中でリボンのお蔭でルネ・メニルに再会できたとはっきり書いている。これを読むと、ブルトンがメニルに事前に連絡したわけではなく、リボンに導かれてメニルの妹（アナイスとシャルロット）の手芸品店にたどり着いたと解釈される。フォール＝ド＝フランスの中心街は狭くて、当時は店の数も少なかったろうから、充分にありえる話なのかもしれない。ブルトンの筆跡を見ているうちに、決して美化された作り話ではないのだ、と思えてきた。『白髪の拳銃』の表紙にのこされた青インクの細かな文字列からアンドレ・ブルトンの指の微細な動きが伝わってきた。そこには、3人の出会いの祝祭的時間がまだほのかに残っている。

文学言語の史的生成——詩と小説の間

ところで、セゼールとブルトンの出会いについて、ラファエル・コンフィアンが面白いことを言っているのので、それを報告しておきたい。ラファエル・コンフィアンは、シャモワゾーと同世代の小説家で、ネグリチュードと一線を画する「クレオール」の作家だが、セゼール批判の急先鋒としても知られている。彼は、『エメ・セゼール 世紀の逆説的横断 *Aimé Césaire, une traversée paradoxale du siècle*』（1993年）の中で、セゼールはネグリチュードの文学においても政治活動においても、マルティニク島の人々からかけ離れていたと手厳しく批判する。コンフィアンがセゼールに触れているのは、この評論だけではなく、彼のフランス語による最初の小説『奴隷と提督』（1988年）にもセゼールが登場人物として登場する。この小説では、第二次世界大戦中の閉鎖空間マルティニクが舞台となっていて、セゼールとブルトンの出会いがフィクションとして詳しく語られているのである。ラファエル・コンフィアンは、エメ・セゼールへの屈折した思いをばねにして彼自身のエクリチュールを築いてきた人なのだろう。この小説の中で、セゼールがどのように描かれているのかを見ておきたい。

『奴隷と提督』には、アンドレ・ブルトンとレヴィ＝ストロースがアメリ

カ合衆国への亡命途上でマルティニクに上陸し、2人が島を散策する様子や、ブルトンが偶然に『トロピック』を見つけて、いわば立ち読みし、詩人セゼールを発見する場面などがある。コンフィアンは、更に想像を逞しくさせて、ブルトンとセゼール、そしてレヴィ＝ストロースとの間の会話を「再現」してみせる。

たとえば、ブルトンがセゼールと対話するうちになんとシュルレアリスムに懐疑を抱くようになり、それをレヴィ＝ストロースに打ち明ける場面がある。セゼールの詩はたしかにシュルレアリスムに方法的に近いが、奴隷制批判などの主題があり、「意味」を排除していない。主題の排除に努めるシュルレアリスムは飽食の文学ではないかと言うのである⁽³⁾。ブルトンがマルティニクで本当に、そのような懐疑を抱いたかどうかは疑わしいが、コンフィアンが、セゼールとシュルレアリスムの関係を巧みに説明していることはたしかである。

とはいえ、セゼールたちは小説の脇役であり、主要な登場人物は、ヴィシー政権下のマルティニクをなんとかしようと試みる若者たちである。その1人にアメデ・モーヴィルという小説家志望の男がいる。彼はフランス留学経験もあり、リセ・シェルシェールの教員だったが、いまは退職し、貧民街で娼婦と一緒に暮らしている。その彼が、かつての勤め先の教員たちが中心となっている『トロピック』を手にとり、そこに掲載された『帰郷ノート』の抜粋を読む場面がある。そして、アメデ・モーヴィルの次のような吐露が読まれる。

私はこれらのテキストを前にして微笑を禁じ得なかった。特に、アンドレ・ブルトンを魅惑したあの詩〔『帰郷ノート』のこと〕は、否定しがたい美に刻印されているが、マルティニクの真の現実からなんとか離れていることか、その造りがなんとフランス的なことか⁽⁴⁾。

コンフィアンは、アメデ・モーヴィルに、もっとあけすけにセゼールへの揶揄の言辞を吐かせている。たとえば、『トロピック』の執筆者で、リセ・シェルシェールの教師をしている1人は、どんな時でもスーツを脱ごうとはしなかったとある。これは、言うまでもなくエメ・セゼールのことである。有名な話なのだが、リセの教員時代のセゼールはいつでも緑のスーツを着ていたため、生徒に「緑トカゲ」という綽名をつけられていたのである。そんな教師を貧民窟に行こうと、モーヴィルは何度も誘ったが、当局に疑いをかけられるからと言って頑固に断わられたと言う。暑くてもスーツを脱がないエメ・セゼールは、コンフィアンに言わせれば、服装からしてマルティニクの庶民からかけ離れているということになるのだろう。貧民窟に行こうとしなかったというのは、市長になってからのセゼールが島民との接触を常に保ち、貧困を根絶しようと努力したことを考えれば一方的だが、セゼールの生活スタイルとして頷けるところもある。

ところで、こうした記述を追っていくと、小説家コンフィアンの資質と、詩人セゼールの資質との大きな相違が見えてくる。コンフィアンの小説的眼差しは人々の表情、言葉、身振りを外面的に描写していく。コンフィアンの小説には、よくどこから来たともされない謎めいた人物が登場する。そのような設定のとき、コンフィアンの外面的描写は、ことのほか威力を発揮する。たとえば、『コーヒーの水 *Eau de café*』(1991年)におけるアンティーリャのような女性である。この、どこからともなく現れた謎の女性は、その内面が見えないままに、その突飛な言動だけが詳細に描かれていく。コンフィアンは、「ここ〔マルティニク〕の人生はそれ自体がシュルレアリスト的であり〔…〕それをあるがままに描けば十分なのだ」。なぜなら、「〔ここでは〕人間が犬や鳥に変身するのに出くわす」からであると述べている。『コーヒーの水』のアンティーリャはまさにシュルレアリスト的の登場人物である。コンフィアンの筆は魔術的リアリズムを思わせる外面性に徹した描写によって、マルティニクの神話的空間を現出させる。

セゼールの言語は明らかにより観念的であり、リヴレスクである。しかし、ここには個々の作家の資質を越えた問題が潜んでいる。『帰郷ノート』の詩的言語は、コンフィアンの写実小説の言語とは異なり、根源的に主観的な自己発見の言語である。薄明に誕生する自己との対話を引き受ける言語といってもよい。エメ・セゼールの伝記著者ロミュアル・フォンクア Romuald Fonkoua は、『帰郷ノート』を「覚醒の過程が語られるオデュセア⁽⁵⁾」と表しているが、『ノート』におけるマルティニクの描写は、小説的な散文ではなく、むしろ、セゼール自身も言っているように「反詩」であり、それがそのまま詩人の覚醒の長い苦しい行程となっている。それは、奴隷の子孫としての黒人集団全体の覚醒、ないし覚醒への呼びかけという、個を越えた次元をも内包している。

カリブ海の奴隷の子孫たちの文学は、まずは、エメ・セゼールやレオン＝ゴントラン・ダマスのような詩的言語によって、同化主義の文学から逃れ、自律性を獲得したのであり、それが次の世代の小説的言語を可能にしたのである。セゼールの詩はシュルレアリスムの手法が目立つが、そこに留まるものではない。セゼールの詩的言語には相反する力が作用している。一つは、シュルレアリスム的な不分明な力であり、それは「叫び」となって湧出する。しかし、他方では、構成へと向かう意志的な力が作用していて、そこにセゼール独特の詩的均衡と緊張が現出する。それに対して、ラファエル・コンフィアンの小説世界には葛藤としての自己覚醒のテーマが不在である。コンフィアンが批判するように、セゼールの難解な詩にエリート主義を見るのはたやすい。しかし、セゼールが、覚醒の中でいままで見えなかったマルティニクの人間を見えるようにする言語生成の場を設定したことによって、次世代の者たちがマルティニク社会を小説言語によって描けるようになったのではないだろうか。エメ・セゼールの言語には、そのような文学言語生成を可能にする界(champ)の成立が見えるのである。「見えなかった」ものを「見えるようにする」とはどういうことだろうか。これは新たなテーマで

もあり、論考を改めることにしたい。

注

- (1) この時代のエメ・セゼールについては、中村隆之『カリブ—世界論 植民地主義に抗う複数の場所と歴史』も参照、特に125頁—141頁。
- (2) パトリック・シャモワゾー / ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』西谷修訳、平凡社、1995年、183頁。
- (3) Raphaël Confiant, *Le Nègre et l'Amiral*, le livre de poche, p.136. (初版は Éditions Grasset & Fasquelle)
- (4) *Ibid*, pp.355–356.
- (5) Romuald Fonkoua, *Aimé Césaire (1913–2008)*, Perrin, 2010, p.62.